様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０２０５

研究課題名（和文）オーラルコミュニケーション力養成の基礎となる語彙学習システムの構築に関する研究

研究課題名（英文）Corpus-based Development of English Vocabulary List for Oral Communication

研究代表者
山本　五郎（YAMAMOTO, GORO）

広島大学・外国語教育研究センター・特任准教授

研究者番号：６０６１３０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：語彙リストの比較分析を行うために700万語レベルの話し言葉コーパスを構築した。
話し言葉で高頻度に用いられるものの検定済教科書では3000語レベルの語彙として扱われていない語群を明示した。また英語の話し言葉において特徴的な語群を品詞別に分類するとともに，単語の多義性や発音綴り，罵り言葉など学習上の課題について考察し複数の論文及び学会発表を行った。開発した話し言葉語彙リストについては携帯端末を活用した言語学習(MALL: Mobile Assisted Language Learning)での活用が見込めるものであり，その実践及び学習効果の測定が今後の研究課題である。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of developing the English vocabulary list particularly designed for oral communication, an English speech corpus, which contains more than seven million words, has been developed based on scripts of English movies and TV dramas.
A comparative analysis between vocabulary items that commonly appear in officially approved Japanese junior high and high school English textbooks and a vocabulary list derived from the English speech corpus successfully captured some features of a group of words that most frequently appear in natural oral communication in English.

研究分野：コーパス言語学

キーワード：TESOL　コーパス　語彙学習

１．研究開始当初の背景

文部科学省による中学校･高等学校の学習指導要領では英語教育の主な目標を「実践的コミュニケーション能力の養成」としている。「英語を聞いて話し手の意向などを理解すること」に加えて「英語を用いて自分の考えなどを話すこと」に重きが置かれており、読み書きと合せて聞いて話すことによるコミュニケーション活動が英語教育の中心に据えられている。現行の学習指導要領では、「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」が学習目標に加えられるとともに、教材についても「聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため，実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする」と明記されている。

EFL 環境である日本の英語教育でこのような学習目標を達成するためには，英語のオーラルコミュニケーションで頻出する語彙を精査し，これを効果的に学習する必要がある。そのような話し言葉に焦点を当てた学習用語彙リストの開発が本研究の目的である。

２．研究の目的

学習指導要領で中学校・高等学校での学習目標目安とされる語彙レベルに注目し，文科省検定済教科書では学習優先度が高くないものの，英語によるオーラルコミュニケーションで高頻度に用いられる語群を整理し，語彙学習に向けた話し言葉で用いられる語彙リストを開発すると共にその特性について分析する。

３．研究の方法

中学校･高等学校の文部科学省検定済教科書に現れる語彙リストの中から，中学校・高等学校での英語教育で学習目標の目安とされる 3000 語の語彙レベルの語彙リストを抽出した。また映画や TV ドラマなど映像素材のスクリプトを基に話し言葉コーパスを構築し，コンコーダンサを用いて会話における出現頻度順に語彙リストを作成した。これを教科書語彙リストと比較することで，話し言葉では使用頻度が高いものの検定済教科書では 3000 語レベルに含まれていない語群を抽出した。

文部科学省検定済教科書に基づく 3000 語レベルの語彙リストについては，中学・高校の検定済教科書の語彙を出現頻度順に整理した先行研究(塩見，2002)に基づいて作成した。検定済教科書 146 種 160 冊に現れた語彙を頻度順に整理したリストによれば，3000 語レベルの語彙は頻度 12 回以上の単語が該当する。頻度 12 回の語群は 182 語であり，本稿ではそれらの単語を全て含め 3035 語を高校までの指導目標の目安である 3000 語レベルとした。また，3000 語レベルに含まれる中学指定基本語 508 語，中学校での指導目標目安の 1200 語レベルの語彙リストを作成し，3 種類のサイズの語彙リストを作成した。

話し言葉コーパスに基づく出現頻度順語彙リストからも同サイズの語彙リストを比較分析用に作成した。

４．研究成果

語彙リストの比較分析と,話し言葉における語彙の多義性や用法の分析を行うために 700 万語レベルの話し言葉コーパスを構築した。

話し言葉で高頻度に用いられるものの検定済教科書では 3000 語レベルの語彙として扱われていない語群を論文および学会発表で明示した。

また英語の話し言葉において特徴的な語群を品詞別に分類するとともに，単語の多義性や発音綴り，罵り言葉など学習上の課題について考察し複数の論文及び学会発表を行った。

以下に分析結果の例を記す。

文部科学省検定済教科書と話し言葉コーパスに基づき作成した 508 語，1216 語，3035 語の語彙リストについて，各サイズの語彙リストの類似性を相関係数（Jaccard 係数）を用いて示したのが(a)-(c)である。

(a). 508 語： $Sim(A1,B1)= |A1 \cap B1|/|A1 \cup B1|=0.423$

(b). 1216 語： $Sim(A2,B2)= |A2 \cap B2|/|A2 \cup B2|=0.499$

(c). 3035 語： $Sim(A3,B3)= |A3 \cap B3|/|A3 \cup B3|=0.512$

（教科書語彙リストについては 508 語=A1, 1216 語=A2, 3035 語=A3，話し言葉コーパス語彙リストについては 508 語=B1, 1216 語=B2, 3035 語=B3 とした）

(a)について，指定基本語である 508 語での比較では，共通して現れた語彙は 304 語であったが，3000 語レベルまで範囲を広げると指定基本語の内，479 語が話し言葉コーパス語彙リストにも含まれていることが分かった。指定基本語 508 語に限定した比較での相関係数の値が低くなっているのは，検定済教科書では学習の初期段階で重要語句として提示している「季節，月，曜日，時間，天気，数（序数を含む），家族などの日常生活にかかわる基本的な語」が必ずしもオーラルコミュニケーションでの最頻出語彙ではないことが一因である。

(a)-(c)を見ると，比較語彙数は 500 語レベルから 3000 語レベルへと大幅に増えているにも関わらず，相関係数の数値に大きな差はなく，教科書語彙リストと話し言葉語彙リストそれぞれに特有の語群が一定の割合で存在することが明らかになった。

3000 語レベルでの比較結果では,970 語の頻出語彙が教科書語彙リストには含まれていないことが分かった。

教科書語彙リストでは充分取り上げられていない語群の一つとして，発音綴りによる表現がある。970 語の内 15 例観察された発音綴

り表現は検定済教科書では充分に取り上げられていない。特に 2 語の単語を同化や連結等の音声特徴に沿って綴った一部の表現については，2 つの語彙リストでの乖離が顕著であった。個別の表現に目を向けると，gonna（going to）, gotta（got to）, wanna（want to）に関しては，話し言葉語彙リストではそれぞれ頻度順に 80 位, 195 位, 220 位であり日常会話でも頻出の表現であるが，教科書語彙リストでは，gonna は 4200 語レベル, gotta は 9100 語レベル，wanna は 14800 語レベルとして扱われている。また gimme（give me）, kinda（kind of）, gotcha（got you）等その他の発音綴り表現については，146 種 160 冊の検定済教科書で取り上げられているものはないことが分かった。

また間投詞の表現についても教科書語彙リストでは取り上げられていないものが多く話し言葉でのみ観察された 970 語の内，52 語が間投詞であった。

大半が ah, mm, oh,のような non-lexical な表現形式であるが，bullshit, fuck, goddamn のような罵り言葉も少なからず含まれている。また bye と okay については，教科書語彙リストではどちらも 4200 語レベルの語彙として扱われており，基本的な口語表現の中には教科書語彙リストでは充分に取り上げられていないものがあることが分かる。同様に gosh については 6000 語レベル，gee については 7200 語レベルという扱いになっている。

上述した話し言葉語彙リストに特徴的な語群の他に，名詞，動詞，形容詞，副詞等一般的な語彙について，話し言葉で頻繁に用いられる 3000 語レベルの語彙リストに含まれているものの，検定済教科書では 3000 語を超える語彙レベルとして扱われている語彙は 523 語であった。

本研究では検定済教科書語彙リストと映画英語コーパスから作成した話し言葉コーパスを比較したが，実践的な英語力に焦点をあてて学習対象の語彙リストの特性を検証するという意味では，書き言葉を含め様々なソースを基にしたコーパスを用いてより精度の高い分析をしていく必要がある。中学・高校での指導目標とされている 3000 語を超えたより広範囲の語彙を対象とした分析や，比較対象に用いるコーパスの構築等については今後の研究の課題である。また，開発した話し言葉語彙リストについては携帯端末を活用した言語学習(MALL: Mobile Assisted Language Learning)での活用が見込めるものであり，その実践及び学習効果の測定も英語教育に資する研究課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

1．山本五郎「文部科学省検定済教科書語彙リストに関する研究‐中学・高校での指導目安 3000 語レベルの語彙リストの分析‐」,『広島外国語教育研究』第 19 号，2016，pp.43-55.(査読有)

2．山本五郎「話し言葉コーパスを用いた中学基本語彙の分析」,『広島外国語教育研究』第 18 号，2015，pp.65-72.(査読有)

3．山本五郎「Memrise を活用したブレンド型授業の実践と課題」,『広島外国語教育研究』17 号，2014，pp.157-165.(査読有)

〔学会発表〕（計 10 件）

1. 山本五郎,「話し言葉コーパスを用いた文科省検定済教科書語彙リストの分析」，大学英語教育学会　第 11 回 英語語彙研究会 年次大会，2016 年 3 月 5 日, 東京電機大学 千住キャンパス(東京都足立区).

2. 山本五郎,「話し言葉コーパスを用いた談話辞 absolutely とその類義表現の分析」，語コーパス学会第 41 回大会, 2015 年 10 月 4 日，愛知大学名古屋キャンパス(名古屋市中村区).

3. 山本五郎,「日本人英語学習者向け語彙リストの分析について」，日本教育メディア学会　第 22 回年次大会，2015 年 10 月 18 日，日本大学 文理学部 (東京都世田谷区).

4. 山本五郎,「話し言葉コーパスを用いた教科書語彙の分析」，日本メディア英語学会 第 5 回（通算 57 回）年次大会，2015 年 10 月 11 日，大阪府立大学　I-site なんば(大阪市浪速区).

5. 山本五郎,「語彙学習用 WBT 教材に求められる機能 ‐フリーオンラインプログラムについての分析と実践‐」，日本情報科教育学会　第 4 回研究大会，2015 年 3 月 7 日，日本大学文理学部百周年記念館(東京都世田谷区).

6. 山本五郎,「E ラーニングによる語彙学習の質保証 -ブレンド型授業におけるフリーオンラインプログラムの活用- 」，日本メディア英語学会　第 4 回(通算第 56 回)年次大会，2014 年 10 月 26 日，愛知淑徳大学　星ヶ丘キャンパス（名古屋市千種区）.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者

山本　五郎（YAMAMOTO GORO）
広島大学
外国語教育研究センター
特任准教授
研究者番号： 60613015